

2020年4月19日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「疑う者たちへ」マタイによる福音書 28章 1～10、16～20 節

主任牧師 加藤 誠

「あの方は死者の中から復活された。そして、あなたがたより先にガリラヤに行かれる。そこでお目にかかれる」(マタイ28・7)。

「さて、11人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」(マタイ28・16-17)。

4月に入ってから教会に「共に集い合う」形での礼拝を休止せざるを得なくなり、カメラに向かって説教する礼拝を初めて経験してみて、普段の礼拝でどれだけ会衆の賛美や祈りに励まされ、奏樂者や聖歌隊の奉仕に支えられてきたか、あらためてその大きな恵みを受け取り直している。教会にとって「集い合う」ことがどれだけ大切か。顔と顔を合わせ、安否を尋ね合い、言葉を交わす。礼拝前のざわめきが奏樂の中で次第に整えられていく緊張。誰かが祈る時にもそれを聞きながら心合わせる会衆がそこにいることの意味の大きさ。

カトリックの場合は司祭がそこに一人居ればミサが成り立つが、バプテストの場合は、牧師以上に一人の会衆が礼拝を選び取ってそこに居る意味の方がずっと重たい。一週間の中で主の日を聖別し、礼拝を選び取る、「一人ひとり」が居て、バプテスト教会は形づくられるのだ。

マタイ福音書 28章の「復活」の場面を読んでいると、主イエスの遺体が収められた墓にでかけたマリアたちに、主の天使が、そして復活の主イエスご自身が、「恐れることはない!」「恐れるな!」と繰り返し呼びかけている。

私たちは「恐れる」。目の前に否定的な出来事やマイナスの数字があふれている時、背負わされている課題や重荷があまりに大きい時、そしてこれからどうなるのか、展開がまったく見えない時。私たちは「恐れ」の中に沈んでしまう。

復活の主は、そのような私たちに「恐れることはない!」と語られるのだ。

使徒パウロはコリント信徒への手紙でこう語っている。

「わたしたちは、世の霊ではなく、神からの霊を受けました。それでわたしたちは、神から恵みとして与えられたものを知るようになったのです」(第一コリント2・12)。

神の霊は、私たちに与えられている「神の恵み」に気づかせてくれる。

パウロにとって、その「神の恵み」とは「十字架のキリスト」。「十字架につけられたキリストに込められた神の愛」のこと。

であるなら、復活の主が語る「恐れるな!」は、「神の霊があなたがたに働いて、この大きな困難な時にも、神の真実の愛に気づかせてくれるように!」という祈りを込めた呼びかけなのかもしれない。「目の前の十字架の、あまりに悲惨な現実、あなたがたの心は悲しみでいっぱいになり、『神の愛と言われても、どうやって信じたらよいのですか!』という否定的な思いでふさがれているかもしれない。そのあ

あなたがたの心に神の霊が注がれて、「十字架のキリストに示された神の大きな恵み」に気づかせてくれるように！」という励ましなのかもしれない。

マリアたちから復活の主の伝言を聞いた弟子たちはガリラヤに行き、あらかじめ言われていた山で、主イエスと出会う。

「11人の弟子たちは…イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」(28・16-17)。

「11人の弟子たち」とは、ユダを欠いた12弟子のこと。ユダヤでは「12」が完全数であり、「11」は不完全をあらわす。「不完全で、不信仰で、情けない弱さを露呈した弟子たち」と言えるかもしれない。復活の主は、そのような「不完全な弟子たち」を招きたもう。

また「疑う者もいた」の「疑う者」は複数形なので、一人の弟子ではなく、何人もの弟子が「疑い」を抱えていたことを意味する。それは「復活なんて、ありえない！」という疑いだったかもしれないし、十字架の出来事の痛手が大きすぎて、何を聞いても否定的にしか反応できない、傷を抱えた心だったかもしれない。あるいは、あんな裏切り方をしてしまった自分がいったいどんな顔をして主イエスに会うことができるのだろう…という戸惑いだったかもしれない。いずれにしても、十字架によって信仰を打ち砕かれ、深い「傷」を抱えた者たち、「疑う者」たちを、主イエスは「ガリラヤの山」に招かれたのだ。

マタイ福音書の「山」は、神の御言葉に集中する場所。

山上の説教(5章)では、「さいわいなるかな！」という主イエスの「さいわい宣言」をもって、主イエスの新しい言葉が語られている。この世の人々が語る言葉ではなく、十字架の主イエスの語る御言葉に集中し、神の恵みと生きる指針を受けていく場所。それが「山」である。

また、マタイ福音書における「山」は、静かに祈る場所。主イエスはしばしば一人「山」に登られて、神と静かに過ごす時間を大切にされた。この世界で神の恵みを生きていくために、私たちは神と親しく交わる静かな時間が必要なのだ。

そしてマタイ福音書の「山」は、神がその御心をはっきりと示される場所。主イエスが三人の弟子たちと「高い山」に登られた時(17章)、光り輝く雲が彼らを覆い、「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者。これに聞け」という声が雲の中から聞こえた。このあと十字架に向かって歩む主イエスこそ、神の愛する子であり、私たちが聞き従って行くべき方なのだ。

「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28・20)

この世界を覆う暗闇の中でいろいろな「疑い」を抱え歩む私たちが、「どんな時にも、どんな状況においても、あなたがたと共にいる！」と言い抜いてくださる神の恵みの前に立て直されていく場所。神のみ言葉に集中し、主イエスの「さいわいなるかな！」の宣言を聞き、静かに祈り、神の御旨を聴き取ろうと心を集中させていく場所。それが復活の主イエスが招いておられる「山」である。

復活の主イエスの招きを受けて、今週も共に礼拝からの歩みを始めていきたい。